

# 宮崎県立看護大学大学院看護学研究科 平成25年度修士論文要旨

## 小児病棟における患児・家族への個別性を ふまえた看護実践上の指針 － 患児・家族の不安に寄り添った自己の 看護実践の分析を通して －

田代 郁代 (応用看護学)

【キーワード】 患児・不安・発達段階・認識・  
24時間の生活

本研究は、小児病棟に入院している患児・家族への自己の看護実践を分析することで患児・家族への個別性をふまえた看護実践上の指針を得ることを目的とする。研究対象はより個別的な看護が必要であると判断し関わった9事例9場面の看護過程である。研究方法は関わりの場面をプロセスレコードに再構成し、研究素材とした。研究素材を精読し看護者が着目した事実、看護者の判断、行なった看護の実際に整理し記述した。さらに、それらを患児・家族が変化した局面で区切り局面ごとに《看護師の判断過程の特徴》を68細目、抽出した。それを研究目的に則して、共通性・相異性から検討すると6つに分類された。その分類されたものの共通性のキーワードから【観察とアセスメント】【年齢に応じたケア】【家族の24時間の生活】【家族の不安】【家族の健康】【チームアプローチ】と抽出した。これら6つに分類されたものをカテゴリーとし、その各カテゴリーの妥当性を検討するため再分類した。さらにそれらを精読し患児・家族への個別性をふまえた看護実践上の指針として以下の8項目を得ることができた。

1. 急性期の子どもの病状は刻一刻と変化することをふまえ、患児の現段階の全身状態を治療の効果と専門知識を重ねて観察し、患児の持つ回復力を信じ、引き出せるよう関わる。

2. 入院という、環境が変化する中で苦痛や不快を伴う治療や処置を行う時は、患児の発達段階をふまえて個々の反応を察知しながら、消耗を最小にするよう方法や道具、手技を工夫する。

3. 突然の入院で患児・家族の不安が増強している時は、その思いを具体的に表出できるように関係を築き、不安軽減が図れるよう模索する。

4. 家族が子どもの病気に対して自責の念で悔やんでいる時は、今後の生活に家族が見通しをたて、安心感が生み出せるよう寄り添い励ます。

5. 入院直後から患児・家族の思いや考えをチームで共有し、患児・家族にとってより良い方法をチームで検討して継続できるよう多職種と連携をはかりながら、計画的に実施する。

6. 家族それぞれがこれまで知恵を出し合ってきた生活を知り、家族の持てる力を信じ、その力で患児や家族を健康的に導く関わりを重ねる。

7. 付き添う家族の24時間の生活は子どもの健康状態に大きな影響を及ぼすことをふまえ、家族それぞれが生活の変化に対処でき、調和のとれた生活を送れるよう関わる。

8. 慢性疾患など長期に治療が必要な疾患をもつ子どもの家族に迷いが見られた時は、これからの24時間の生活を家族とともに思い描き、生じた問題を考え、家族が解決のために見出した決断をともに支える。